

貴司山治撮影映画『岡山と高知 作家同盟の

講演旅行一九三二、十一―十二』について

萬田慶太

プロレタリア作家貴司山治⁽¹⁾の遺品の一つに、一九三一年末頃に撮影された古い十六ミリフィルムがある。長男の伊藤純氏が整理編集して長らく保管していたものである。

二〇一二年二月に、占領開拓期文化研究会が伊藤氏に協力するかたちで、調査およびデジタル化（テレシネ）がおこなわれた。本映画は、「日本プロレタリア作家同盟」（以下、「作家同盟」）の地方での活動を撮影したもので、テレシネされた映像は六分四十三秒である。

本稿では、その概略を紹介するとともに、映像の資料的価値を考察する。

一 映画『岡山と高知 作家同盟の

講演旅行 一九三二、十一―十二』

この映画は作家同盟の講演旅行を、その内部から撮影した資料としてきわめて貴重である。一九三一年末は、作家同盟とその地方支部との交流がもつとも活発化した時期であった。また、映像からは地方に関心を寄せていた当時の運動の様子が伝わってくる。そのことは、後述するように、貴司の撮影・編集方法にも表れている。

映画の冒頭にはまず、「岡山と高知 作家同盟の講演旅行 一九三二、十一―十二」というタイトルが示されている。このタイトルや途中で入るキャプションは貴司山治によるものと考えられる。

次に、「講演後の茶話会 カフェ・パウリスタにて 岡山」とキャプションが映し出される。そして、建物の内部（カフェ・パウリスタ）の場面になる。長く並べられたテーブルの両側に三十数名ほどの人物が座っている。カメラは何度か位置を換え

場面	時間	場所	キャプション
A	0分10秒〜	岡山市内	「講演後の茶話会 カフェ・パウリスタにて 岡山」 ↓画像1
B	1分51秒〜	同右	「農民組合の少年」
C	2分13秒〜	船上・浦戸港	「高知へ」 ↓画像2
D	3分32秒〜	高知城	「公園散歩」 ↓画像3

岡山での講演者であった。
江口渙⁽⁴⁾であると思われる。池田、猪野、江口は、貴司と同じく
映画では、この「茶話会」を含めてキャプションの挿入によって区切られた場面は全部で七つある。以下、「場面A」―「場面G」として整理すると次のようになる。



画像1

ながら、話し合う人々を映し出す。多くは若い男性で、テーブルの上に帽子を置き、煙草を吸っている。中には学生服を着た少年もいる。数名の人物が大写しになる（画像1参照）。画像の右手前から奥（左）へ着席順に、一人目が池田寿夫⁽²⁾、二人目が猪野省三⁽³⁾、三人目が



画像2

場面Bは茶話会シーンのつづきである。「農民組合の少年」とキャプションが入り、場面Aと区別されている。さきほどの三人の少年たちの姿がふたたび映し出される。慣れないカメラの前で硬い表情だが、一人の少年がにっこりと笑う様子が印象的である。「農民」の「少年」が参加していることに注目をうながすような編集意図が感じられる。

場面C「高知へ」では、初めに船上の江口と池田が映る。その後、浦戸港対岸の工業地帯⁽⁵⁾、そして、浦戸港の栈橋が映る。そこには作家同盟高知支部員の二人が手招きしているのが見える（画像2参照）。

場面D「公園散歩」⁽⁶⁾は、高知城のある「高知公園」で撮影さ

*ただし手書き字幕ではなく、実際に芝居小屋に掲げられた看板を撮影している。

場面	時間	場所	キャプション
E	4分12秒〜	同右	「市中遠望」
F	5分16秒〜	高知座	「プロ文学と映画の夕」(*)
G	5分34秒〜	高知支部事務局前	「作家同盟高知支部——の人々」 ↓画像4



画像3

れている。道路を挟み、高知県公会堂の前で右から江口、池田、高知支部員の二人の計四人がカメラを向いて並んで立っている（画像3参照）。公会堂前の掲示板には「プロレタリア文学と映画の夕」の案内ポスターが確認できる。高知城の堀と橋も見える。



画像4

局前の記念撮影だろう（画像4）。江口、池田の姿も確認できる。煙草を吸いながら談笑したり、ふざけあったりしているようなごやかな様子である。江口、池田以外では、一人の女性を含む八人の人物が確認できる。その中には桟橋まで迎えに来ていた二人も含まれている。後述する高知支部員も含まれていると考えられるが、個人の特定は困難である。

画像3の後、四人は公会堂の右奥高知城へとつづく大手門筋を歩いていく。四人の後ろ姿と、当時存在した藤並神社の鳥居や、その奥に山内一豊の銅像が映っている。

次の場面E「市中遠望」は、市街地の俯瞰である。開けた場所にあつて市中を遠望できるのは、高知城二の丸だけであるから、ここで撮られたのだらう。城の東北方向の高知市内や、城の南の方角である海や港が見える。城から市中を眺める江口、池田らがベンチでくつろぐ様子が確認できる。

場面Fでは、建物の正面に大きく掲げられた「プロ文学と映画の夕」の看板が映っている。芝居小屋「高知座」だと考えられる。この場面だけは手書きのキャプションがなく、看板を撮影しているだけである。小屋には「大入」の幕が掛かっているが、内部の様子は分からない。

場面G「作家同盟高知支部——の人々」は、高知支部事務

二 関西講演旅行の全体像

では、講演の全体像はどのようなものだったのだろうか。講演者は何を見、何を議論したのか。時代背景や当事者たちの回想などを手がかりにしながら、探っていきたい。

この講演旅行には詳細な報告資料が存在する。『文学新聞』第五号（一九三一年十二月二十五日）に掲載の「労働者や農民と親しく顔を合せて 作家同盟の講演隊関西に活躍 二週間に亘る文化宣伝」である。

記事は、「十一月二十二日夜、『こゝは御国を何百里離れて遠く：』といふ勇ましい軍歌に送られて東京駅を出発した一行は、

江口渙、大宅壮一、猪野省三、池田寿夫の四人だ、関西講演に赴く吾々一行が、満州に出征する軍人と乗り合せたのも奇妙な対照だ」と、出発の様子を報じている。

講演旅行の全体を『文学新聞』第五号の記事からまとめると、以下のような日程になる。

＊

一九三一年十一月二十二日夜、江口渙、大宅壮一、猪野省三、池田寿夫、東京駅出発。

二十三日夜、岡山着。プロキノ巡回映写隊と合流。貴司山治合流。プロキノ岡山支部と作家同盟岡山支部準備会主催「プロレタリア文学と映画の夕」を岡山公会堂で開催。江口、猪野、貴司、大宅、池田ら講演。プロキノ、映画上映。

二十四日午前、岡山のカフェ・パウリスタで座談会。

二十四日夜？、岡山県倉敷市玉島町において、全農青年部主催で講演会。江口、猪野、池田、講演。プロキノ、映画上映。

二十七日夜、京都新京極永楽亭で、文学新聞読書会。貴司、池田が参加。

二十八日夜、細田源吉合流。作家同盟大阪支部主催「文学新聞発刊記念プロレタリア文学の夕べ」を大阪天王寺公会堂で開催。細田、貴司、江口、猪野、池田の講演。大宅東京へ帰宅か。前掲『文学新聞』第五号には、「俺達の講演会を我が事として守るものはやはり労働者なのだ」とあり、「講演を中止くつた貴司、細田、猪野その他八人も皆引つ張られた、

講演会後雨を冒して警察へ貰ひ下げに行つたが、やつと貴司と細田その他四人は出されたが猪野の外四人はいくら交渉しても返さないのどうとうブタ箱の中に惜しいがのこしてしまつた」とある。

二十九日夜、江口、貴司、池田が、神戸から船に乗る。プロキノ巡回映写隊と再び合流。

三十日夜、高知市の高知座において、「プロ文学と映画の夕」開催。貴司、池田の講演中止。映画は上映される。十時、カフェ・ブラジルにおいて座談会。

同日、神戸市青年会館において、徳永直、山田清三郎、本庄陸男、細田源吉、猪野省三、丸山定夫の講演。

十二月一日夜、高知県高岡町、江口、貴司、池田の講演。

二日夜、高知県山田町、江口、貴司、池田の講演。同日、関西学院で、山田清三郎と猪野の講演。

＊

この一九三一年暮れの関西講演旅行は、岡山、京都、大阪と進み、そこで猪野省三らが検束・留置された。それが理由かどうかは分からないが、ここで二派に分かれ、貴司らは高知に渡り、残留組は神戸方面で活動した模様である。映画前半（岡山）に映っていた猪野が後半（高知）で登場しないのはこうした経緯による。

岡山市での講演は、「十一月二三日夜」、岡山公会堂で開催された。会場はどのような様子だったのだろうか。以下、『文学

新聞」の記事に従って講演旅行の様子を確認しよう。

記事では、「聴衆は約五百人、大抵は学生や市民だが少数の婦人労働者もある、わざわざ近村から自転車で駆けつけた百姓もある、一汽車おくれて来た貴司山治を加えて講師は五人」と報じられている。

岡山での演題は、「文化連盟の結成 猪野 農民文学に就いて 池田 文学新聞と文学サークル 貴司 ブルジョア文壇の現状 大宅 打倒反動文化 江口」であった。

プロキノ側の報告では、『映画クラブ』第五号（一九三二年一月一日）に、「たつた一つの慰安は——プロキノ映画と 会場に自転車デモ」とある。

翌二十四日午前、座談会が持たれた。『文学新聞』の記事はその様子を「近村で働いてゐる同盟員の高木進二君やピオニールなどの元気な顔も見えて、講演会では云へないこと、聴けないことが盛んに質問され、討論された」と報じる。映画の「場面A」「場面B」はこの座談会を撮影したもののだろう。⁽¹⁰⁾

講演隊はその後、玉島町（現・岡山県倉敷市玉島地域）を訪れた。記事には「瀬戸内海の古い港町へ 年寄や子供まで集る 玉島町の夕」とあり、ここで「貴司と大宅」が引き返し、「江口、猪野、池田の三人」が講演を行ったとある。プロキノによる映画上映も行われた。玉島町で「その夜一人検束されたので、会が終ってから警察に貰ひに行く」とある。

では、次に高知の講演はどのような様子だったのだろうか。

二十九日夜、神戸から船に乗った一行は「江口、貴司、池田の三人」であった。三人は三十日朝、高知市に入る。高知城については、「一目で全市が見下せる高望だ、こゝで三百余年農民を搾取してゐたのだ」と記述されている。映画には、高知城周辺を写した「場面D」と高知市を一望する「場面E」がある。高知での様子は、「三十日夜高知座といふ芝居小屋で『プロ文学と映画の夕』が開かれた、集まるのは四百人位、学生や市民、特に婦人がとても多い」と報じられている。

しかし、講演は官憲によつて中止される。『文学新聞』には、「高知に入る 乱暴な中止に 五百人の聴衆憤慨す」とある。さらに記事は「江口は大丈夫だったが貴司は三分、池田は一位で直ぐ中止だ乱暴というより無茶だ、全く何の話もできなかったことをおわびする」と報じている。

一方、プロキノは、「こゝの警察は又無茶で説明一切タイトルを読むこともまかりならぬと来たものだから映写が始まると最前列にガンバつてゐた児童があたりかまわず大声でタイトルを読みあげる。結局子供達が説明者の役をつとめて官憲の鼻をあかした。」（『映画クラブ』第五号）と報告している。講演は中止を受けたが、映画は聴衆の機転に助けられながら上映されたのである。

高知でも「近所のカフェブラジル」⁽¹²⁾で「座談会」が持たれ、講演中止に抗議するように「七十人」余りが来たとのことである。翌十二月一日の夜に三人は高知市から「高岡町」（現高知県

土佐市高岡町)に入り、講演をおこなった。上映会も行われた。二日には山田町(現高知県香美市)で、同様に講演と上映が行われた。しかし、それぞれの会場は示されていない。

その後、プロキノ巡回映写隊は「帰京後十二月中旬から長野県の農村へ転戦」⁽¹³⁾している。

『文学新聞』の記事では、全体で「こんどの関西地方巡回公演は八回、座談会は六回、講演会に集った聴衆は約二千三百人、座談会に約二百人だった」⁽¹⁴⁾と小括されている。

後に「岡山支部活動報告」(『プロレタリア文学』一九三二年六月臨時増刊号)は、以下のように報告している。

一九三一年十一月二十三日にプロキノと共同で「プロレタリア文学と映画の夕」を持った。だがこれは、種々の点において成功であったとは云はれなかった。此日動員された数は、約五百名で、その内労働者二百三十名、一般学生二百五・六十名であった。

其後プロキノ移動映写隊と共に移動講演をやつて農村を廻つたがこれも成功だとは云はれない。これに動員された総数(何れも農民)四百五十名程だった。

また、「高知支部活動報告」(同前)も以下のように報告している。

二、プロレタリア文学と映画の夕

十二月一日―三日

講師 江口渙、貴司山治、池田寿夫

一日 高知(高知座) 聴衆五百。労働者農民五割

二日 高岡町、聴衆二百。九割まで農民

三日 山田町、聴衆二百。八割まで農民

総計約一千名の聴衆に、プロレタリア文学の意義任務、等を十分に浸透さす事が出来、以後支部活動に大いに役立つたのであるが、一方、此のカムパの財政的損失は現在まで支部の財政的基礎をおびやかしてゐる。未だ負債も全部支払つてゐない。

映画『岡山と高知 作家同盟の講演旅行 一九三二、十一―十二』は、作家同盟の岡山・高知各支部とも連動した大規模な関西講演旅行の一部を記録したものであったのである。

三 講演旅行の回想

一九三一年の岡山、高知における講演は、報告以外にも、参加者の感想や当事者たちの回想が残されている。

岡山における映画上映には、「岡山 Sサークル員」の名前で、「公開を通じて」『映画クラブ』第四号、一九三二年十二月一日)という感想がさつそく寄せられた。「Sサークル員」は、「われ／＼

はブル映画に何時も三十銭も五十銭も持つて行かずにそんな金があればわれ／＼の映画を創造するために、プロキノの旗を守るために応じやうじやないか」と呼びかける。また、「奴隷戦争を見たかったのだがそれは途中で止してしまつた」が、「これは岡山プロキノの責任だと思ふ」という意見を述べた。地方のサークル員は、投稿によつてプロキノ上映会に応答したのである。

宇野真佐男「岡山プロキノのこと」(プロキノを記録する会編『昭和初期左翼映画雑誌・別巻』戦旗復刻版刊行会、一九八一年十一月)において、当時を回想している。宇野によれば、作家同盟岡山支部準備会は、「片岡鉄兵の弟子を志願していた岡本武君」を中心に組織された。

宇野は、「そのときは能登節雄が⁽¹⁵⁾「ドレイ戦争」、「メーデー」、「ニュース」などを持つて来たと記憶している」と回想している。岡山や高知をめぐつたプロキノ巡回映写隊は、能登節雄に率いられていた。巡回映写隊はプロキノの重要な活動の一つであつた。

また、片岡薫「高知のプロキノ」(前掲『昭和初期左翼映画雑誌・別巻』)は、「コップ高知地方協議会の設立を記念する催しとして」、講演が行われたと証言している。

高知支部の講演は、一九三一年十一月二十一日付の『大阪朝日新聞 高知版』で「プロレタリア文学講演会」と題して予告されていた。これによれば、「過般ナツ高知地方協議会を

結成した作家同盟高知支部、高知職場座、高知プロキノの三団体」は、「日本プロレタリア文化連盟地方協議会」の設立を記念し講演を行う、とある。職場座は高知の演劇サークルであろう。しかし、途中で脱落したのか、講演時も協力していたのか定かではない。演者は「秋田雨雀、貴司山治、神近市子、橋本英吉、黒島伝吉⁽¹⁶⁾の諸氏」と予告されている。

しかし、実際に高知で講演したのは、江口、池田、貴司の三人だつた。映画タイトルは、「奴隷戦争」「港湾の労働者」「一九三二年東京のメーデー」「進め戦旗」「東京山宣葬」「プロキノ・ニュース第五」と記されている。これらが上映されたかは確かではないが、宇野の記憶と一部重なっている。

現在、作家同盟高知支部の顕彰活動は、非常に盛んである。

一九三一年の講演を取り上げた研究では、猪野睦「作家同盟高知支部」(『埋もれてきた群像―高知プロレタリア文学運動史―私家版、二〇〇四年十一月)が最も詳しい。猪野によれば、大阪から高知に帰郷した作家同盟員弘田競と、「小説を書きたくてツテを探していた」プロキノのメンバー佐野順一郎⁽¹⁷⁾が出会つた。

一九三一年十一月、弘田、佐野の二人は、信清悠久、毛利孟夫、榎村浩⁽¹⁹⁾らのメンバーを集め、作家同盟高知支部を結成した。猪野は「プロレタリア文学と映画の夕」の開催をきっかけとして、『文学新聞』が普及するとともに、高知の各地区でサークル活

動が拡大したと指摘している。

作家同盟高知支部の責任者は弘田競であつた。プロキノ高知

支部の責任者は佐野順一郎であつた。二人は高知支部の中心的なメンバーだった。しかし、佐野にとってプロキノの活動はあまり本意でなかつたらしい。弘田によれば、講演会の翌々日、佐野に頼まれた信清らが「彼が貴司の推薦で本部書記局へはいりたいといっている」と報告する事件が起こつた。講演会の後、佐野は貴司のつてを頼つて上京し、小説家として活動を開始する。

弘田は、佐野が講演会を小説家になる方途として利用したのではないか、と考えている節がある。高知支部の内部においても、講演に対する思惑は一樣ではなかつたのである。

また、当時の講演参加者の貴重な回想が、「座談会「土佐プロレタリア詩集」をめぐつて」『ダッタン海峡』第六号、一九八一年五月）に残されている。

吉永⁽²¹⁾「プロレタリア文学と映画の夕べ」を高知座でやつたのへ私も行きました。印象に残っているのは土居憲がふた言み言いと弁士注意！さらに土居憲がみ言いと禁止！。検束と言われると土居憲が場内を突つ走つた。そのとき有光絢子が、止めたのになんで検束するかと叫んだ。そういう勇気のある女がいた。

ただプロキノと言つたところで手を振るとか握手するとか、メーデーとか、場面としては非常に短かつたが当時であつただけに印象に残りました。当時として大胆

な表現でした。場内は八〇％は席が詰っていました。

この回想から、講演会が地元の人々の強い意志によって支持されていたことがうかがえる。一方、警察当局は講演会に対してかなり神経質になっていたようだ。

貴司山治「横村浩の時代」『間島バルチザンの歌―横村浩詩集―』新日本出版社、一九六四年十月）にも講演の回想がある。貴司は「戦旗防衛講演会という名目であつた」と回顧している。また、「浦戸の棧橋についた時、そこには弘田、佐野、信清、毛利（？）」の姿があつたと証言している。場面C（画像2）を記憶に留めていたのだろう。また、「大高坂城（高知城）を見物した」ことにもふれている。しかし、「旭座」で講演したと証言しており、「高知座」の記憶違いか、あるいは不明な事実があると考えられる。

また貴司は、「高知市松淵町」に作家同盟高知支部の事務局があつたこと、この講演会後の座談会で、横村浩と出会つたことを回顧している。

なお映像とは別に、小田切秀雄構成解説『日本文学アルバム13 プロレタリア文学』（筑摩書房、一九五五年八月）に、貴司、江口、池田が写つた別カットの写真が存在している。

四 ハリコフ会議以降の文化活動の展開

一九三一年の作家同盟の講演旅行にはどのような特徴があるのだろうか。

作家同盟の講演会自体は、東京大阪では何度も行われていた。特に一九三〇年の「戦旗」防衛講演会は、江口渙『たたかいの作家同盟記・上』（新日本出版社、一九六六年八月）で著名である。²³この時期行われていた講演会「戦旗の夕」の形を踏襲して、一九三一年末の講演会も行われたのだろう。

一九三〇年に関西地方で行われた「戦旗」防衛講演会については、岡村洋子「三重近代文学研究序説——『戦旗』防衛巡回講演会をめぐって」（『三重大学日本語学文学』二〇〇〇年六月）、尾西康充『蟹工船』における労働者の連帯——松阪の「戦旗」防衛関西巡回講演会に触れながら」（『三重大学日本語学文学』二〇〇九年六月）に詳しい。岡村は、「大多數の地方大衆の応答があつてはじめて広汎な運動となり得るものであり、また、各地方の個別・特殊性によって〈受容〉、若しくは〈拒絶〉される一面が存したはずである」と論じた。

しかし、一九三一年末の岡山・高知講演会には、「戦旗」防衛講演会とは別の状況が存在した。一つは、作家同盟の全国的な組織化が目的であつたこと。そしてもう一つは、講演や映画は農村問題への関心に基づいていたことである。

その理論的背景と考えられるのが、「日本に於けるプロレタリア文学運動についての同志松山の報告に対する決議」（『ナッパ』一九三二年二月）、一九三〇年十一月のいわゆる「ハリコフ

会議」の決議である。決議では、『戦旗』発行所の支局が全国的に、特に農村・工場の中に、三百箇所も持たれて、その各々の周囲に労働者・農民より成る読書会の組織が興されたこと、その読書会と日本プロレタリア作家同盟及びその地方支部が密接に結びついた事」は、「正しい戦略であつた」と評価された。一方、農民文学への更なる注目も提案された。決議は「農村・工場に於ける読書会の中に旺盛なる批評的活動を勃興せしめる必要がある」とサークル活動を提案した。

このハリコフ会議に理論的背景を持っていたのが、中野重治や貴司山治が関わった『文学新聞』であつた。

この地方組織の強化、農村における文学サークル創設の問題は、一九三一年当時、まさに喫緊の課題であつた。すでに蔵原惟人は、古川壮一郎の変名で、「プロレタリア芸術運動の組織問題——工場・農村を基礎としてその再組織の必要性」（『ナッパ』一九三二年六月）を発表していた。

中野重治も「通信員、文学サークル、文学新聞——文学運動の組織問題に関する討議の成果」（『ナッパ』一九三二年八月）において、ハリコフ会議を強調している。中野はすでに地方に拡大していた『戦旗』や『文学新聞』などを使って、組合に必ずしも依存しない地方サークルの形成を論じた。

一方、鹿地亘は「文学サークルに関する問と答」（『プロレタリア文学』一九三二年一月）において、蔵原の「プロレタリア芸術運動の組織問題」（前掲）の影響を強く受けた形で、地方サー

クルの目的について「各サークルの共同闘争によつて講師を招^{ママ}携し、文芸講演会、文学の夕、又はその後の批判会、共同ピクニック等を催し、これらの活動を通じて、作家同盟を支持して居ないサークルをも、作家同盟支持の方向に導くこと等」であると論じている。鹿地は、サークルの明確な方向性を示し、地方支部に一定の自主性を確認した。しかし、これは映画の後の方針だろう。

一九三一年末の講演会は地方サークル創設を促進するための「地方協議会の設立」という目標に基づいて、サークル活動の農村地帯への浸透が図られたのである。場面Bで、「農民組合の少年」に注目しているのもそのためであつた。

さらに、具体的な講演の内容を推測することで、農村問題の取り上げ方を考えることができる。

『文学新聞』第五号の報告には、「江口の希望社のバクロ、貴司のブル文士の生活バクロなどは 百姓 諸君はキセルをくはえたまゝじつときいてゐたが、池田が『百姓と文学』と題して黒島伝治の『豚群』須井一『綿』小林多喜二の『不在地主』の筋を面白く語り出したら、キセルをくはえたオツさん達も、子を抱いたオカミさんも二階に群がる元気な百姓青年諸君も、人事でなく、我身にひき比べて大きな利害を考へさせられるとみて 眼を すえてきゝ入つた⁽²⁾」と報じられている。

池田寿夫は、「農民とプロレタリア文学」(『ナッパ』一九三二年二月)で、黒島伝治の「豚群」について「激化せる土地闘争

に結びつけられた農民の姿を描いたものではなくして、豚の差押に抗して、全村挙つて豚群を野山に放つといふ物語で、極めて原始的な初歩的な闘争でしかない」と批判を加えていた。

また、小林多喜二については、「労働者と貧農との提携といふ××的課題を芸術化しようとしたことは、如何なる農民作家と雖も企及し得なかつたことである」と論じていた。池田は、多喜二を都市プロレタリアートと農民の対立を描いた先駆的な作家として論じたのである。池田の結論は、農民闘争の現在を描く文学が、作家同盟の作家から生まれなければならない、というものであつた。

また、江口渙は「高知に来て」(『土陽新聞』一九三一年十二月八日夕刊)という感想を講演時に残している。江口は「高知の漁民騒動」と蜂起を起こした「ランカシアの小市民」を比較する。そして、高知の漁民もまた、ランカスターの例のように、「機械漁業の独占資本主義への発展によつてその地位を奪はれる時が、さう遠くない」と警告する。その上で、江口は「工業的に大規模な生産があまりなされてゐない高知に於ては、将来プロレタリア運動の重要な役割は、多く漁民と農民と没落破滅した小市民の結合の上に行はれるのではなからうか」と予測した。江口も農漁村と都市プロレタリアートの対立と結合を高知から読み取っている。また、江口は講演と地方との接触を通じて、新しい漁民運動と「高知独特」の「地方色」を背景として、『静かなるドン』のような傑作が生み出されることを高知支部に求

めるようになった。江口の発言は後の佐野順一郎の作品などにも影響しているだろう。

映画は場面Dにおいて、江口、池田と高知支部の二人を含む四人が、山内一豊の銅像に向かって歩いていく様子を映し出している。地方農村を支配していた封建領主の居城に向かって四人は歩いていく。それは、四人がひとまずは封建制度を敵として認識し、それを問題化しようとした証左であるかのように見える。さらに映画は、領主の視線をなぞるようにして、市中を俯瞰する。封建領主の視線に重ねられた、作家同盟員たちの視線は何を意味するのだろうか。

映画『岡山と高知 作家同盟の講演旅行 一九三二、十一—十二』は、ハリコフ会議から三二年テーズにかけてのプロレタリア文化運動過渡期の貴重な映像記録である。ここには、プロレタリア作家たちがいかにして地方に働きかけたのが映し出されている。そして何よりも、大きな困難の中で、情熱的な作家たちと地方の人々が結びつき、生き生きと交流する様子を映像によって記録したその意義は計り知れないであろう。

注

(1) 貴司山治 一八九九—一九七三。徳島県生。小説家。一九二〇年『大阪時事新報』の記者となり、二五年「新恋愛行」が『東京時事新報』の懸賞小説に入選。二八年、「舞踏会事件」を『無産者新聞』に発表したのを契機に作家同盟に参加。運動のなか

で文学の大衆化をとえ、「忍術武勇伝」、「ゴー・ストップ」などを発表。プロレタリア文学のなかに、大衆小説の位置づけとジャンルを切り開いた。三五年、コップに対する弾圧で検挙。『近代日本社会運動史人物大事典』（日外アソシエーツ、一九九七年一月）より。

(2) 池田寿夫 一九〇六—一九四四。新潟県生。評論家。東京大学農学部入学と同時に文学の道を志し、同人雑誌「大学左派」を創刊。作家同盟に入り、その後日本プロレタリア文化連盟中央協議会機関誌部長となり、『プロレタリア文化』を編集する。一九三三年十二月に検挙。三六年、懲役二年の判決を受けた。なお、池田は三三年春、プロキノ東京支部の最終処理にあたった一人であった。前掲『近代日本社会運動史人物大事典』より。

(3) 猪野省三 一九〇五—一九八五。児童作家。栃木県日光西方村の小学校代用教員であったが、画家を目指して一九二六年上京。二八年、日本プロレタリア芸術連盟に加入、「ドンドンやき」(『プロレタリア芸術』二月)を発表。ナツプでは江口渙と知り合い、二九年から『少年戦旗』の編集を担当。同年作家同盟に参加。戦中期は創作から離れ、工業新聞の記者などをして過ごした。大藤幹夫「解説」(『日本児童文学大系 三〇』ほるぷ出版、一九七八年十一月)より。

(4) 江口渙 一八八七—一九七五。東京生。小説家。評論家。社会運動家。一九二二年熊本第五高等学校卒、東大英文科に進む。夏目漱石の門に入り、森田草平、芥川龍之介を知る。一七年に「児を殺す話」(『帝国文学』一月)で文壇に登場。民衆芸術論の視点から高い評価を得、白樺派以降の大正文壇を民衆文学の方向でリードした。二〇年日本社会主義同盟創立にあたって中央執行委員に選出。二九年、作家同盟が結成され、三〇年その委員長となり、三三年まで歴任した。三三年小林多喜二の労農葬

儀実行委員長となり検挙。三十七年から三十八年暮れまで治安維持法違反により投獄された。前掲『近代日本社会運動史人物大事典』より。

- (5) 『ふるさとの想い出90 写真集 明治大正昭和 高知』(国書刊行会、一九七九年十一月)の「セメント工場」には、「土佐のセメント工業は、明治二年小松龍太郎が西孕ではじめた。同三八年土佐セメント合資会社に変更し、後株式会社に変更して生産も大飛躍した」とあり、高知港付近の写真が確認できる。
- (6) 『高知市県庁方面現住者名図』(高知地理学会、一九二九年)より、高知城全域にわたって「高知公園」という名称が確認できる。高知市役所編『高知市史(復刻版)』(名著出版、一九七三年九月)によれば、「第十六章 名勝旧跡 第一節 市内の部」に「高知公園」とあり、「本市の中央にあり元、大高坂山と称す、藩主山内氏十六代三百年間の治城なりしが、明治六年に至り改めて公園となす」とある。

- (7) 『写真アルバム 高知市の昭和』(樹林舎、二〇一四年八月)の「高知城お堀端の建物」において、映像と同様の建物が照合できる。『高知市県庁方面現住者名図』(前掲)においても高知県公会堂の住所が城内に確認できる。

- (8) 前掲『高知市史(復刻版)』の「藤並神社」の項目によれば、「高知公園の東麗にあり、藩祖一豊公、同夫人若宮氏及二代藩主忠義公の三霊を合祭せる県社なり、元は城内三の丸にありしを文化三年七月此地に遷して社殿を拡張せり」とある。映像に映っている鳥居はこの鳥居であろう。現在は撤去され、鳥居跡に石碑が立っている。

- (9) 前掲『高知市史(復刻版)』に、「又社頭に屹立せる藩祖騎馬の銅像は大正二年開市三百年祝典に際し藩の旧臣其他有志者の建立する所にして、威風堂々たる英姿颯爽の風、坐るに当年の武

勇の偲ばしむるものあり」とある。また、映像と同じ鳥居と銅像が並んだカットの写真は『ふるさとの想い出90 写真集 明治大正昭和 高知』(前掲)において存在する。

- (10) 場面Aと同一の座席構図の写真が、「たつた一つの慰安は——プロキノ映画と 会場に自転車のデモ」『映画クラブ』第五号、一九三二年一月一日)に残されている。

- (11) 高知座は高知に存在した芝居小屋である。『高知市史 中巻』(高知市、一九七一年十月)によれば、明治二年に芝居が解禁されて「まもなく稲荷新地には玉江座が、玉水新地には高栄座が定設小屋として建設され」た。この高栄座が明治十九年に中島町に移って高知座となる。また、公文豪「明治の劇場」『土佐史談』二二三号、二〇〇六年十二月)には、「広栄座＝高知座」で、「明治五年頃に開業」とある。

- (12) 『描かれた高知市 高知市史 絵図地図編』(高知市、二〇一二年三月)に、「カフェーブラジル 高知支店」の外観写真が掲載されている。

- (13) 前掲「たつた一つの慰安は——プロキノ映画と 会場に自転車のデモ」

- (14) 「労働者や農民と親しく顔を合せて 作家同盟の講演隊関西に活躍 二週間に亘る文化宣伝」『文学新聞』前掲

- (15) 能登節雄 一九〇八〜二〇〇一。札幌市生。一九三〇年日大芸術学部を中退。三一年プロキノの同盟員となり、主として公開上映の映写マン、移動映写での地方オルグを担当した。三一年に岡山、高知での上映の映写担当。三三年一月から二月、北海道青森県下を全国農民組合北海道連合会などの主催で巡回。九月東北地方第四次巡回、東北・北海道凶作農民救済の巡回などに参加。三二年、独立プロ「音画芸術研究所」へ派遣され、「河向ふの青春」のスタッフとなった。前掲『近代日本社会運動史人

物大事典』より。

(16) 弘田鏡 一九〇七〜一九八七。高知県生。運動家。歴史家。

一九三一年大阪より帰郷し、佐野順一郎、信清悠久、横村浩、毛利孟夫らと作家同盟高知支部結成。三二年、反戦誌「赤いラッパ」を発行するが、発禁押収され一斉検挙された。三三年、ハルピンに渡り、国際運輸会社や満洲農業公社に勤めた。四六年、高知に帰ってからは県立図書館で「皆山集」「憲章簿」その他の近世資料出版に尽力した。『不屈に生きた土佐の同志』（治安維持法犠牲者国家賠償要求同盟高知県本部、二〇〇六年十二月）より。

(17) 佐野順一郎 一九〇九〜一九六〇。高知県生。小説家。

一九二九年プロキノに加わり、農村巡回上映などするが、三一年、作家同盟高知支部を結成。翌年上京、東京で作家活動を開始する。三二年、「縊死」（『プロレタリア文学』四月臨時増刊号）を発表。高知の漁民騒動を取り上げた「港の漁民」、転向問題を扱った「敗北者の群」、横村浩をモデルとした「季節の風」などが代表作。晩年は宿毛の小作争議に取材した。猪野睦ほか『続 土佐の近代文学者たち』（土佐出版社、一九八八年十二月）より。

(18) 毛利孟夫 一九二二〜一九九三。高知県生。運動家。一九二九年、

横村浩らと「戦旗高知支局・中学班」を構成。三一年、作家同盟、プロキノに参加。三二年、プロレタリア文学講習会講師を務める。二月、朝倉の兵営に反戦ビラをまく。四月、日本共産党に入党。三二年、検挙され懲役三年。四二年、予防拘禁で東京多摩刑務所に収監。四九年釈放されて帰郷。戦後は日本共産党高知県党の結成に参加。前掲『不屈に生きた土佐の同志』より。

(19) 横村浩 一九二二〜一九三八。高知県生。詩人。土佐中学に入學するが、チフスで休学。軍人養成の海南中学校に転校。「戦旗」読者となりマルクス主義文献を読破。岡山市関西中学校に転校。

三一年、帰郷。日本プロレタリア作家同盟高知支部に参加。三二年、「生ける銃架」、「間島パルチザンの歌」などの詩を発表。反戦革命詩人として注目を集めるが、四月検挙され、懲役三年の実刑。拷問により拘禁性躁鬱病、食道狭窄症になり、非転向のまま出獄した。この後、獄中詩、「アジアチッシェ・イデオロギー」などを書き、貴司山治を尋ねて二度上京。三六年、高知における人民戦線事件で再検挙。土佐脳病院に収容され、三八年九月、拷問が原因で病没した。前掲『近代日本社会運動史人物大事典』より。

(20) 弘田鏡「誇り高き青春群像（一）」（五）（『高知県における共産主義運動戦前の思い出』治安維持法犠牲者国家賠償要求同盟高知県支部、一九九〇年七月）

(21) 座談会出席者説明には「吉永進（横村浩旧友グループ）」とある。

(22) 猪野睦『埋もれてきた群像——高知プロレタリア文学運動史』（私家版、二〇〇四年十一月）によれば、土居憲は「地元の弁士」である。

(23) 江口渙「たかひの作家同盟・上」（新日本出版社、一九六六年八月）には、江口、大宅壮一、中野重治、片岡鉄兵、小林多喜二、貴司山治をメンバーに結成された巡回講演隊について詳細に書かれている。関西を巡回し、東京に帰ったとたん、江口は検挙された。しかし、一九三二年末の講演会についてはふれていない。

(24) 前掲「労働者や農民と親しく顔を合せて 作家同盟の講演隊関西に活躍 二週間に亘る文化宣伝」。